

1. はじめに - 文学と宗教 -

< 集中講義の方向付と前提 >

1. 集中講義のテーマと視点

(1) 宗教と文学との関わり合いについて理論的な考察を行う。

宗教研究の視点から

(2) 近代日本文学をキリスト教との関係において論じる。

キリスト教思想と日本の近代文化論の視点から

2. 文学を宗教的視点から問う (宗教研究から見た文学)

宗教文学あるいは文学の宗教性とは

ダンテの『神曲』とドストエフスキーの『罪と罰』

3. 問題設定の一般化: 「宗教と文学」 「宗教と文化」

(1) 「宗教と文化」という枠組みで、ティリッヒ (Paul Tillich) の議論

宗教文学と文学の宗教性 (狭義の宗教と広義の宗教) 題材と宗教性との関係

絵画の場合

ピカソの「ゲルニカ」の宗教性

(2) 文学の宗教性:

ティリッヒの「文化の神学」

近代における宗教と文化の分裂の克服、二重真理的状况を超えて

(a) 意味世界の根拠 (体系・形式と内実)

- ・「宗教は文化の内実であり、文化は宗教の形式である」
- ・「絵画、詩歌、音楽が神学の対象になりうるのは、その美的形式の観点からではなく、その美的形式の中で、またそれを通してわれわれの究極的関心事のある方面を表現するそれらの力の観点からである」

美しいかではなく、表現力の問題

- ・文化: 意味世界 (意味体系) 問いの具体的な表現形態
- 宗教: 意味世界の根拠・正当化 究極的な問い

(b) 究極的な問い (問いと答え)

- ・「状況」 「問い」

「神学が考えなければならない「状況」とはそれぞれの時代にさまざまな心理的社会的諸条件下においてなされる創造的な自己理解である」

「ある特定の歴史的時代における人間の創造的自己解釈の総体」

その限りで、文学も宗教研究の対象となりうる 近代日本の「状況」?

- ・「弁証神学は「答える神学」である。それは「状況」の中に含まれている諸問題に対して、永遠の使信の力と、問題状況に供する概念的的手段とをもって答えるのである」

- ・生きるか死ぬかの問い (to be or not to be)
- ・自分の生を肯定できるか、何のために生き死ぬのか、生きる意味とは

4 . 日本の近代文化論の視点から

社会的状況 (時代の問い、時代の精神状況) との連関における文学

(1) 伝統的な社会 : 意味世界の安定性・自明性

既存の答え どんな問題にもきちんとした答えがあった

(2) 近代世界 : 伝統の解体・大衆社会

個人としての生きる意味の危機

個人主義、エゴイズム

自分であること危機

不可視のメカニズムへの埋没

(3) 現代人の問いと実存主義・実存主義的文学 : カフカ、カミュ、安部公房

「終わった所から始めた旅に、終りはない。墓の中の誕生のことを語らねばならぬ。
何故に人間はかく在らねばならぬのか? ……」

自分とは誰か、自分であることをいかに確認し他者へ説明できるのか。

『他人の顔』 『人間そっくり』

(4) 神や救いといった宗教的答えはそこには存在していないとしても、現代人の宗教的問い (究極的な問い) が鋭く鮮やかに表現されている。

< 文献 >

1 . ティリッヒ (Paul Tillich, 1886-1965)

『ティリッヒ著作集』 (白水社) とくに第七巻

『芸術と建築について』 (教文館)

『組織神学 (全三巻)』 (新教出版社)

2 . 芦名定道

『ティリッヒと現代宗教論』 (北樹出版)

『ティリッヒと弁証神学の挑戦』 (創文社)

3 . 安部公房

『終りし道の標べに』 (新潮文庫)